

アメリカの危険な遊び

米国の現政権は新型核兵器を開発する政策をじわじわと進めている。
今日の不確実な世界では、核保有国による兵器開発競争の再開は望ましくない。

原文：Playing a dangerous game

Nature Vol.428(451)/1 April 2004; www.naturejpn.com/digest

タカ派の中のタカ派にとって、ピカピカして豪華な装置のついた新しい核兵器ほどこたえられないものはない。米国エネルギー省の最新の予算要求書の細かい文面を見れば、彼ら猛禽類がこのところ忙しいのは明らかだ。

新しい核兵器を作るための計画はどんなものでも相当な議論的となり、しかも米議会の特別許可を必要とする。それでも米エネルギー省の今後の年間支出計画では、2005年の予算要求で核兵器開発の種をまこうとしている。この計画は核爆弾の「サブシステム試験とフルシステム試験」を要求している。地下深くに埋められた掩蔽壕えんぺいこう（敵から身を守り、味方を保護する所）など、「強化された」標的を消滅させようというものだ。さらには、ネバダ州の古い核実験場の修復や、水素爆弾を爆発させるのに必要なプルトニウム起爆装置の大量生

産設備を建設する計画もある。

この計画は予算案がいうところの「将来への備え」のためであり、ロス・アラモス研究所の核兵器科学者4人が書いた論文を信頼すれば、小型核兵器の備蓄を目玉としているらしい(B. L. Fearey *et al.* *Comp. Strategy* 22, 305–324; 2003)。この論文の著者たちは、こうした兵器はならず者国家が化学・生物兵器の地下貯蔵を進めるのを抑止できるだろうと主張している。だがこの論文は、核爆弾によって「市民を巻き添えとした被害が減少」と述べることで、「使用可能」な核兵器という亡霊、つまり軍縮派が青ざめるような概念をよみかえらせている。

複数の政府高官いわく、新しい兵器を開発する具体的な計画はなく、この論文は将来の選択肢を評価するための単なる「研究レポート」だと否定している（本誌4月1日号455

ページ参照）。だが米政治に詳しい筋によれば、今回の予算要求は、ブッシュ政権内のタカ派が新たな核兵器政策を推進している動きだという。これらの高官を支持しているのは、兵器科学者の少数派だ。彼らは冷戦の全盛期、ソ連との核兵器開発競争に巨額の資金を与えられて以来、ずっと人生の意味を失っていたのだ。

この政策はすでに、アメリカの安全保障にダメージを与えつつある。ロシアの政治家は米国の新たな核政策に対抗して、次世代の戦略兵器の開発に関する声明を発表した。もしアメリカとロシアが小型核兵器の開発に着手すれば、おそらくインドやパキスタンといった他国も追従することは想像に難くない。主たる軍事的脅威がテロリズムと思われる今日において、持ち運び可能な核兵器の拡散がいわけではない。

こうした安全保障事情への対応策として、アメリカの兵器科学者は国家防衛の最前線に向けて核爆弾を設計するような必要性はないのだ。例えば、兵器科学者の多くは極秘の核捜査チームの一員として、この冬にニューヨーク、ワシントンなどの都市で行われた新年祝賀会を監視していた。国土安全保障省と協力して、空港検問所や国境検問所で微量の放射線をかぎ分ける検出器をつくらせている技術者もいる。そして、核兵器安全管理計画に携わる者は、世界の安定を支え続けている。

このような崇高な努力が、懐古趣味の少数者の計画によってだいなしにされようとしている。軍縮に関心のある物理学者や、ブッシュ政権内でタカ派の新兵器への熱狂ぶりを受け入れられない高官たちは一致団結して、核への野望をつぼみのうちに摘み取るべきである。これ以上、世界が危険な状態になってからは遅いのだ。 ■



GETTY IMAGES